

## 漢方薬として使われた竜骨

株式会社 バルクワールド 川 添 洋

漢方薬にはその物性から植物性・動物性・鉱物性の3種類がありますが、その中で「竜骨」は鉱物性の漢方薬です。難波恒雄氏の『漢方薬入門』は「竜骨」について、『新生代のマンモスゾウ、サイ、シカ、コダウマなどの哺乳動物の化石。古代中国では、これを恐竜から想定した龍の骨と考えていた。これに書かれた亀甲文字が殷帝国文化発掘の端緒になったといわれている。漢方では鎮静、鎮痙薬として心悸亢進、不眠症、精神不安、異常興奮などの用いる主要な石薬である。』と紹介しています。ちなみに、正倉院の薬にも残っているこの「竜骨」ですが、藪内清氏は『中国の科学文明』の中で鹿角や象牙／象歯も竜骨の名称の下に置かれていたとしています。

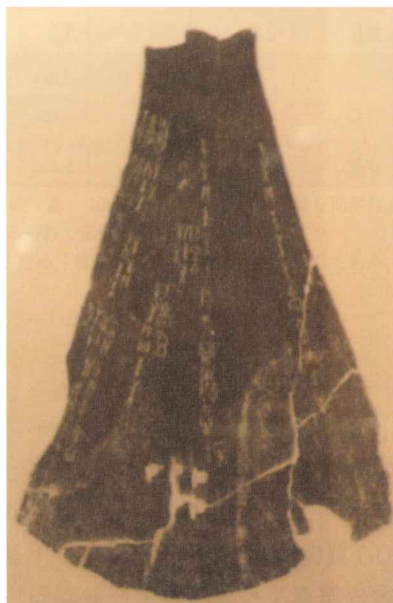
さて、約3000年前に滅亡しすっかり忘れられている中国の古代王朝『殷』が見つかったエピソードについては、貝塚茂樹氏編『古代殷帝国』に次のように書いています。それは、北京の著名な学者であった王先生がマラリアの持病に苦しんでいたのを見て、王家の食客の劉鶚という人が「竜の骨」が効くと聞き買ってみると、袋の中から古そうな骨の破片が出てきて、骨の表面にナイフで刻んだような小さな文字らしいが読め、王先生に献じると古代の亀甲獣骨文字に間違いのないとなり、どこで採取されたかを辿った結果、『殷墟』が見つかる大発見となったと云うものです。

ところで、日本では福岡県田川郡香春町に位置する香春岳は“竜骨”の産地として古くから知られていました。8世紀に編まれた『豊前国風土記』逸文には、『～。昔、新羅の国の神が自分で海を渡って来て、この河原に住んだ。すなわち名づけて鹿春の神という。また郷の北に峰がある。頂上に沼がある。《周囲三十六歩ばかり。》黄楊樹が生えている。また竜骨がある。第二の峰には銅と黄楊、竜骨などがある。第三の峰には竜骨がある。』（引用は『風土記』=平凡社=）とあります。尚、702年の豊前国の戸籍に依れば秦部姓が総人口の93%を超えていたと田村圓澄氏他『宇佐八幡と古代神鏡の謎』は指摘し『秦人の渡来は四世紀末頃からは

ないかといわれている。』と書いています。

“香春岳”と聞くと、五木寛之氏の『青春の門』等に依って、一の岳で石灰石が採取されている事は鉱業に従事する人に留まらず広く知られていますし、今も石灰を採掘している会社があります。では、往古、いつ頃から石灰石は採取されていたのでしょうか。そして、秦人である渡来人は何を求めてわざわざ山間の香春に来たのでしょうか。それについては、奈良／東大寺の大仏造立（開眼供養752年）の際に使われた銅は長門国の長登鉦山の銅が有名ですが豊前国からも同程度供給されたとされていますから、銅鉦石及びその精錬時に融剤として入れる良質な石灰石が在る香春は、有用資源のある魅力ある土地でした。

尚、石灰石は炭酸カルシウムの事で珊瑚や貝の死骸が堆積して出来たものですので、豊前国風土記が述べる香春岳の“竜骨”は石灰石を指していると理解できます。ともあれ、『本草備要』には、石膏や石鍾乳に並び石灰の項があり『辛温性裂堅物散血定痛生肌止瘡血～』とありますから、漢方薬の一薬として認識され使用された事は間違いありません。



上海博物館；竜骨